平面に「刻む」イメージ

「早川俊二展」

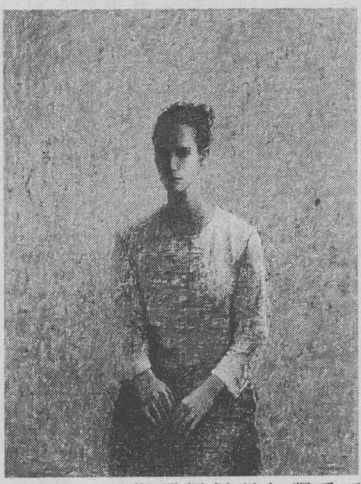
強靭な独自のマチエール（絵肌）に、精妙な写実の詩を刻む画家、早川俊二が、二十二点の作品を携えパリから一年ぶりに戻ってきた。一貫して追究し続けている女性の肖像画「クレマンス」のシリーズを中心に、大作「女性の像（クレマンスX）」である。徹底した凝視から生まれる写実の鑿が、これまで以上に自在に振るわれて、画面が軽い浮揚感を帯びている風だ。人のフォルムも鋭くそがれ、あのジャコメッティの彫像へと想いがつといったのは、タッチの息詰まるようなせめぎ合いによって己のイメージを固定してゆくその手際が、画面の中に埋もれている物を彫り起こしているようにも見えるからである。

あの、夏目漱石の「夢十夜」の中の第六夜の場面、運慶が仁王像を刻む話。「あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ……」。芸術の蘊奥を突いた言葉として忘れ難いが、早川は彫刻でなく絵画という平面でそれを試みている気がする。

パリの国立美術学校時代から積み重ねた鉛筆によるデッサンに、この画家の原点と油彩の秘密が隠されている。今回は出ていないが、百号もあろうかという巨大な画面に鉛筆で描かれたモノクロの人物像が、震えるような空気の中で息づいていた。早川は、このデッサンで築いた世界を油彩でも具現したいのだ。そのために彼は、独自の絵の具作りから始め、「二十年もかかってようやく、理想に近い絵の具ができた」という。

同展は二十六日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで開催。

（編集委員　竹田博志）



女性の像（クレマンスX）

蕪―99―II

リンゴなどのほかスズメの絵も四点ある。

今回注目したのは唯一の蕪、

全体に画面が少し明るくなった。一個の蕪、一個のリンゴが、その空間の支配者然としてそこにある。独特の描法が効果を上げていると思う。早川の仕事を、平面でありながら「刻む」ながっていく。

平面に「刻む」イメージ　　「早川俊二展」

強靭な独自のマチエール（絵肌）に、精妙な写実の詩を刻む画家、早川俊二が、二十二点の作品を携えパリから一年ぶりに戻ってきた。一貫して追求し続けている女性の肖像画「クレマンス」のシリーズを中心に蕪、リンゴなどのほかスズメの絵も四点ある。

今回注目したのは唯一の大作「女性の像（クレマンスX）である。徹底した凝視から生まれる写実の鑿が、これまで以上に自在に振るわれて、画面が軽い浮揚感を帯びている風だ。人のフォルムも鋭くそがれ、あのジャコメッティの彫像へと想いがつながっていく。

全体に画面が少し明るくなった。一個の蕪、一個のリンゴが、その空間の支配者然としてそこにある。独特の描法が効果を上げていると思う。早川の仕事を、平面でありながら「刻む」といったのは、タッチの息詰まるようなせめぎ合いによって己のイメージを固定してゆくその手際が、画面の中に理もれている物を彫り起こしているようにも見えるからである。

あの、夏目漱石の「夢十夜」の中の第六夜の場面、運慶が仁王像を刻む話。「あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ・・・・・」。芸術の蘊奥を突いた言葉として忘れ難いが、早川は彫刻でなく絵画という平面でそれを試みている気がする。

パリの国立美術学校時代から積み重ねた鉛筆によるデッサンに、この画家の原点と油彩の秘密が隠されている。今回は出ていないが、百号もあろうかという巨大な画面に鉛筆で描かれたモノクロの人物像が、震えるような空気の中で息づいていた。早川は、このデッサンで築いた世界を油彩でも具現したいのだ。そのために彼は、独自の絵の具作りから始め、「二十年もかかってようやく、理想に近い絵の具ができた」という。同展は二十六日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで開催。

（編集委員　竹田博志）

日本経済新聞　２０００年（平成１２年）２月２日（水曜日）掲載